

## 第十四章 愛知用水着工

### 1 愛知用水着工第一号——三好池

着工第一号、まとまって調査設計の終わった三好池を、日本古来の溜池築造法と組み合わせ、後からできる愛知用水三好支線と接続すればよい。用地についても、地元の久野源蔵常務理事の屋敷中で行う仕事のようなもので、華々しく昭和三十二年十一月五日、起工式が盛大に行われた。

三好支線は、日進村米野木と東郷村諸輪の境界線付近から分水、高位部は福谷うきがやで揚水、低位部は三好支線として三好池に一旦貯溜、境川流域を刈谷市の東境、西境付近まで受益する支線である。

三好池の前身の曲池は、上、下、二つの池からできていた。名のように上池は字のごとく曲型をしており（貯水量二〇万立方メートル）、三好の境川左岸を灌漑する大切な池であるが、流域が少なく、上水うえみず、下水したみずを受けて、上、下、二つの池からできていたが、今回の工事では中央の堰提を五メートル掘削して、そこに日本従来の刃金土（粘土層）を入れて止水しているのを、アメリカの土堰堤築造法によって、粒度分析した刃金土を入れて、搗き固める（タ



牧尾ダム着工

ンピンクローラー）工法を取って工期を早めて東郷池建設のモデル工事とした。（貯水量二〇〇万立方メートル。元の二つの池の十倍）

## 2 牧尾ダムの着工

用地買収交渉の難航していた牧尾ダムも、水没者の心からなる諒解の下に集団で愛知県内は、高師、天白、三好台地、本地ヶ原など、それぞれ愛知県農地部開拓課の並々な努力によって集団入植の計画を諒解して（これは愛知県として後の不老会副理事長水野甚一の計らいが大であった）、昭和三十二年十一月十七日、着工にこぎつけることができた。

用地交渉にたずさわられた公団の役職員の努力と、長野県側の協力的交渉により、ほとんどトラブルらしいトラブルもなく移転を完了して、無事着工できたことは、わが国のダム建設史上に例を見ないものであったが、それは地元水没者と久野庄太郎の真心と血と涙で固まったような努力が根になっていることを忘れてはならない。

この木曾の水は百年の

夢をうつつに愛知用水

として濃尾の野をうるほす

ゆくてに幸多かれ

昭和三十六年六月二十七日

元愛知用水公団総裁 浜口雄彦書

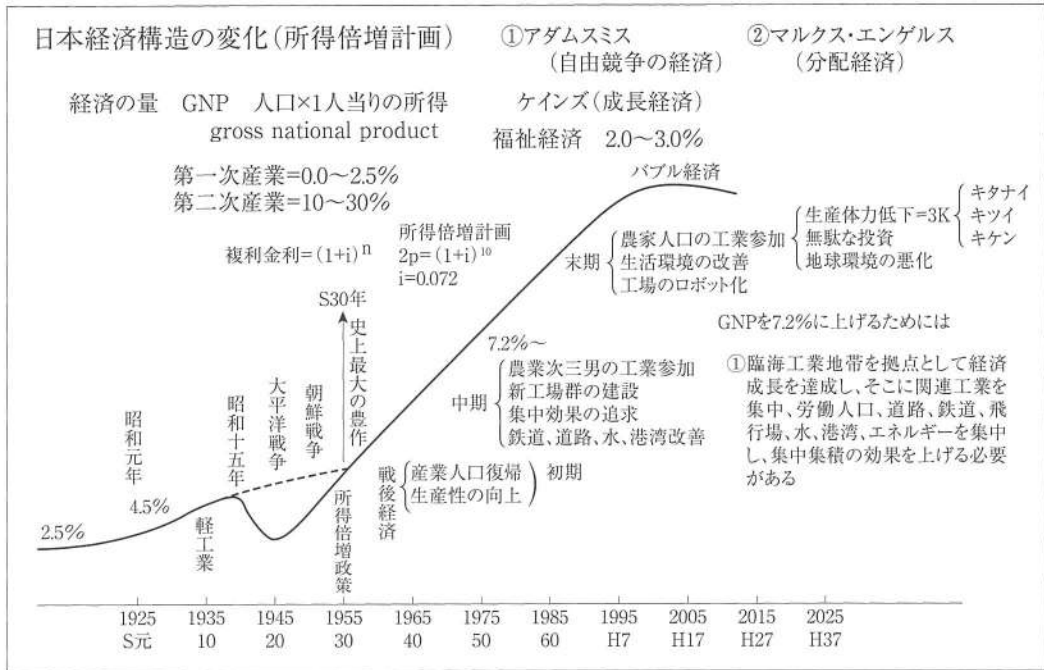
### 3 日本の経済構造の大変革

日本の国の経済構造は明治以来、農業を中心に、以後、軽工業、繊維工業を中心としてきたが、昭和の初めより軍需工業が加わり、その経済の伸びは年率四・五パーセント程度であった。しかし、太平洋戦争により都市という都市、工場という工場は焦土と化し、次ページ図に示すように明治の初めに還ってしまっていた。

戦後は農業中心とし、食糧増産に重点をおく政策に迫られてきたが、経済の伸び（ケインズ理論の経済成長）は二〜三パーセントにすぎない。そこに朝鮮戦争（昭和二十五年）の特需景気、農業の機械化の見込みも立ち、池田内閣は図に示すような所得倍増の政策を実行に移していった。

幸いにも昭和三十年は史上まれに見る大豊作で、食糧輸入代金千数百億円を工業原材料輸入にふり向けることが可能となり、農業基本法を制定。農業経営を機械化によって農家一戸平均七反歩を二町歩に拡大する見込みが立ち、農家の二、三男はもちろん、農業後継者の工業参加を可能にした。

そして、日本のどこかに鉄鉱石の加工から製鋼一貫生産のできる大工場を中心とした工業コンビナートを造り、日本の経済を十年で倍増にする所得倍増政策を樹立して着々と実現にかかった。



まさに、吉田さんが言われた池田は経済を知っているということが現実となって表れてきた。

かくして、伊勢湾の知多側に日本経済の根幹ともなる臨海工業地帯の建設が進み、昭和六十年代から平成にかけて、日本経済の大発展を遂げた。

#### 4 愛知臨海工業期成同盟会

久野庄太郎さんはそんな大計画のあることは知らずに、農民の負担軽減のために、いよいよ名古屋南部の臨海工業を進めねばならぬと決心して、地元の市町村長を中心に名古屋南部臨海工業地帯建設期成同盟会を設立するために上野、横須賀、八幡（のち知多市八幡、岡田、旭）を説いて廻り、上野―小島、仙敷。横須賀―高津、白羽、知多石井町長を説き、ついに昭和三十年九月二十四日、愛知臨海

工業期成同盟会を結成した。

会 長 白羽清一（横須賀町長）

副会長 仙敷金四郎（上野町長）、

石井次郎（知多町長）

幹事長 久野庄太郎、技術者 浜島辰雄

## 5 佐布里池の構想

久野さんは自費で『光水漫録』（愛知用水と臨海工業）「高潮防潮堤を作りましょう」「佐布里池を作りましょう」を二六、〇〇〇冊発行して地元配り、地元住民へPRにつとめた。

昭和三十二年六月の末頃であった。東京から帰った久野庄太郎さんが、息せき切って半田の土地改良区事務所にいた私の所にやって来て、「浜さん、水だ水だ」「鎌ヶ谷」「七曲」とわけのわからんことを言うので、「何ですか」と聞くと、東京で経済安定本部に地域開発小委員会ができ、その委員長が伊藤武雄さんで、彼の下にそれぞれ工業立地の専門家を集めて、日本の工業化の基地をどこにするか、これから決めるとのことだ。

この頃、池田内閣となり、日本経済界は工業立国の方向に動き始め、日本のどこかに巨大な工業コンビナートを造り、これを拠点に日本の工業化をはかる、いわゆる所得倍增計画で、経済安定本部の太平正芳を中心に安芸皎一、大来佐武郎、伊藤武雄など地域開発の専門家が拠点調査に乗り出し、本格的な調査を始められた。

とくに伊藤武雄氏の下に地域開発の専門家が集まり、全国的に適地調査に乗り出した。

主なるメンバーは、伊藤武雄（委員長）、笹尾仁（工業配置）、紺野昭（住宅団地造成）、江端正義（住宅団地計画）、宮下特五郎（地域経済）、新沢嘉芽統（工業用水、東大教授）、吉川博也（自然環境）、江端正義（環境問題）、石原舜介（農工大教授）、酒田哲（野村総研）などであった。候補地は、

東京湾（拡大余地なし）

伊勢湾（将来性大）

瀬戸内海の水島地区（水源が小さい）

有明海（漁業と競合、辺地過ぎる。地区が熊本、佐賀、長崎と各県にわたり、まとまりが悪い）

そこで、私は、

「ダムは加世端、ダムサイトは佐布里―白沢道一〇〇メートルの地点に築堤すれば取水容易で、必要量を愛知用水から補給できる。鎌ヶ谷、七曲は百万トンが精一杯、それ以上はむり。新しい日本の工業地帯を造成するには少なくとも三〇〇万坪から五〇〇万坪の工業用地が必要だ。そうすると毎秒三〇五立方メートルの水が必要（年間一億〇一億五千万立方メートルの水）。それには私が今まとめている農業の田植え時期を四月末から六月末に引き延ばして、水路断面を三〇五立方メートル空けなければいけません。その点は、資料ができているから大丈夫。明日、鎌ヶ谷、七曲、加世端を歩きましょう」

と約束し、翌日、あらかじめ計画した地図を持って、鎌ヶ谷―七曲―加世端を歩いた。久野さんは一度に加世端が気に入って、

「公団の専門家と管理組合の専門家で、こっそり歩きましょう」

と昭和三十年七月初めの暑い夕立模様の日であったが、現地を歩いた。

愛知用水公団土質試験室長の守谷正博（土質）、野田健二（土質）、山田光敏（ダム施工）、名古屋管理組合計画部長岩田計郎、工事課長谷川堯で現地を内密に踏査した。貯水池の満水面三二メートルとして五五〇万立方メートルは貯水でき、幹線水路から直接流下させればよい絶好の位置、標高であることを確認した。その日はずいぶん暑い日で、久野さんの家に引き揚げて飲んだビールの味が忘れられない。

別途私が作成している「愛知用水事業に伴う農業受益計画試案」（巻末の「資料編」掲載）によれば、農業用水は昭和二十二年の大旱魃の年でも最大ピークの八月中旬の一〇日間で一  
九、八六四、七七〇立方メートル（一日にすれば一、九八六、四七七立方メートル）。毎秒にすれば、二二・九九二立方メートル、兼山における取水断面三〇立方メートルとしても七・〇〇八立方メートルの余裕がある。佐布里池、東郷池で調節すれば、これ以上の取水が可能でもある。

また、佐布里池の有効貯水量五〇〇万立方メートル、工業用水の必要量が毎秒五立方メートルとして、愛知用水幹線から無補給で一・八二日は貯水池の供給で操業できることを詳細に数字で示した。

その頃、三重県四日市の平田市長は国の大計画を察知して、桑名と四日市間に超特大の製鉄所を誘致する案を発表し、水は濃尾三川の水を利用し河口堰により給水し、埋め立て予定地として、桑名―四日市間に、少なくとも三〇〇万坪―五〇〇万坪を埋め立てできる地域は充分にあると言い、田中知事も乗り気で企画部長、田川亮三を開発本部長として乗り出してきた。

1日の水受容の想定表

農業用水	145,000千m <sup>3</sup>
上水道用水	17,000千m <sup>3</sup>
工業用水	28,000千m <sup>3</sup>
190,000千m <sup>3</sup>	

愛知県知事桑原幹根も、ここにいたってあわてだして企画部長松尾信資に命じて水対策の検討をさせた。埋立て地の地耐力はすでに久野さんのもらってきた調査費で調査済みであるが、水は木曾川から愛知用水を通して供給できるか、愛知用水公団に、工業用水として毎秒三〇五立方メートルの供給可能か、問い合わせた。

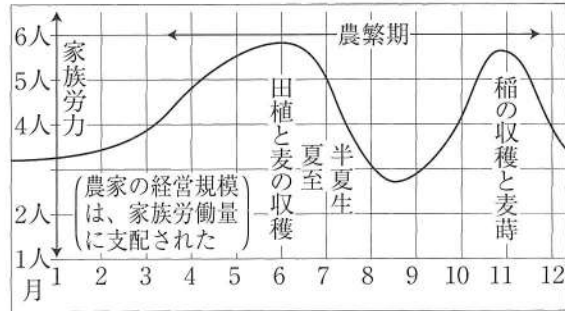
愛知用水の水計画については、当初、木曾川調査事務所が調査に当たり、二子持ダムから牧尾ダムに計画変更になり、不足分は地元の補助溜池一〇個を計画し、上の表のように、いわゆる世銀との当初協定計画では、これ以上の供給能力には自信がないから、「ノー」と答えられた。愛知県は知事以下、これで慌てた。愛知県企画部長松尾信資は、先に私が考えた「愛知用水事業に伴う農業受益計画試案」によって水が捻出できることを知っていた。

その計画は農業の田植え時期を分散する（早・中・晩に分ける）ことによって、昭和二十二年の大旱魃の年でもピーク時七、〇〇八立方メートル以上の断面の余裕があり、製鉄工場建設までに専用のダム（味噌川、阿木川ダム）を建設し、佐布里貯水池で調整すれば、臨海工業の埋め立てが完成、工場が建設できるまでには、毎秒六立方メートル以上供給可能となる。

## 6 田植時期分散という発想の根源

一年、三六五日の真ん中に当たる日を半夏生はんげしやうという。今年是一年で一番日の長い夏至から十一日めの七月二日に当たった。

戦前における農家労働量と経営規模の関係



田植え期における家族労働が5人であれば、1人1人の田植え能力が $0.1\text{ha}$ とすると、田植え期間4日間、 $2.0\text{ha}$ が経営規模である。

私の親父は明治三年生まれの熱心な百姓で、暦を見ては農繁期になると、「半夏生半作」と言って田植えを急ぎ、溜め池の杵を抜いて六月二十日には代掻きを終わり、翌日夏至から田植えをする習なわしになつていた。杵を抜いて田植えをしても雨が降らず、干上がってしまったら大変、早く植えなければ、半夏生作が迫ってくる。東尾張の丘陵から知多半島に至る農家の宿命であつた。

明治用水や抜下用水を隣に見て、この宿命を解消する術すべはなかつた。

わずか一週間の遅れで半作となる。理由がわからず不思議であつた。

三重高農（現三重大学生物資源学部）で植田教授に稲の穂の源にできる幼穂形成の理論を聞き、中野教授から、日本農業が稲作を家族労働に依存する限り、農家経営の規模は家族労働の数に支配されると教えられ、尾張東部から知多半島にかけての農業用水の必要を感じながら戦争に巻き込まれていった。

植物が花を咲かせ実を結び子孫を残すには、微妙な摂理の下に行われている。植物は太陽光線の照射時間の長短に支配される感光性によるものが多く、稲や大豆はこのグループに入る。これを花芽の分化、幼穂形成などと称し、日の短くなることに感じて花芽を形成するグループを短日性、長くなる刺激を感じるものを長日性という。

早生種は短日性に敏感で、晩生種は比較的鈍感である。とくに早生の優秀な品種は短日性に敏感で、五月上旬蒔きの苗は夏至を過ぎると幼穂形成に入る。これを取って田植えすれば、妊婦を絶食させて旅をさせるようなもので、稲では奇形不時出穂など、いわゆる半夏生半作ということになる。

戦前の田植えは優雅な茜襪に菅の笠といったが、一面からいえば、一家総出で一日も早く田植えを終わり、半作を防ごうとしたといえる。

## 7 臨海工業地帯、知多西岸に設置

名古屋南部臨海工業地帯に進出を予定する工場は左の通りで、

愛知製鋼株式会社（トヨタ系）……既設拡大

東海製鉄株式会社（上野横須賀地先）

大同製鋼株式会社（製鋼）（横須賀地先）

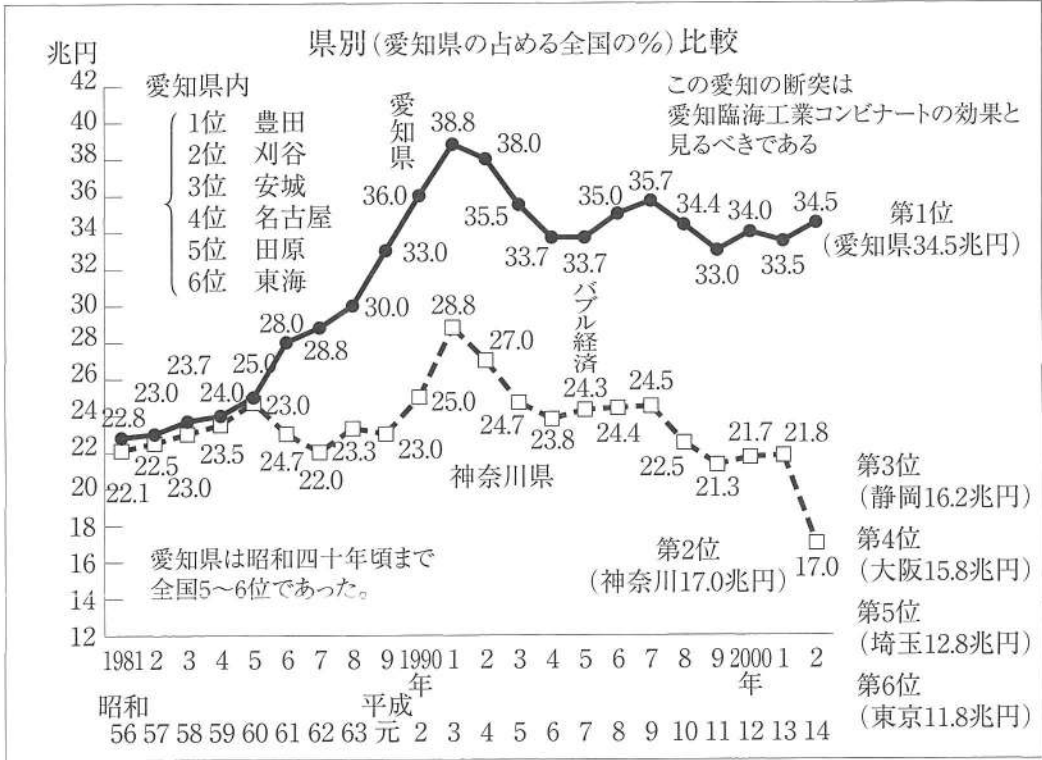
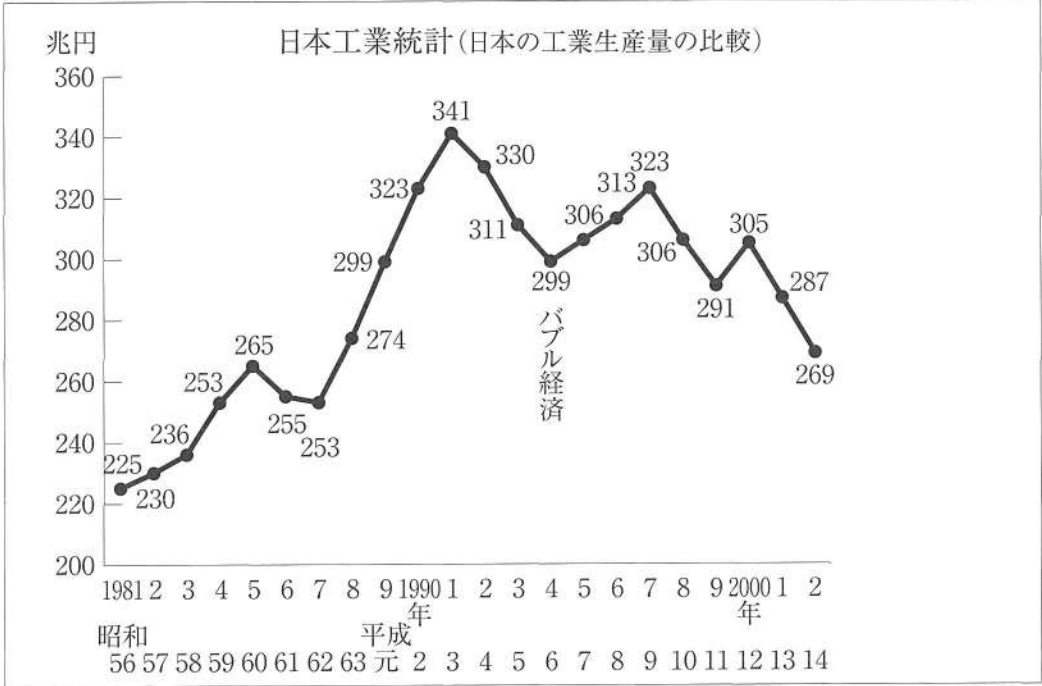
石川島播磨株式会社（造船）（養父地先）

日新製粉株式会社（八幡地先）

中部電力株式会社（火力発電）（日長地先）

出光興産株式会社（朝倉日長地先）

東邦ガス株式会社（LNG）（朝倉地先）





名古屋南部臨海工業用地に立地調査に入った出光興産・出光佐三社長とそのチームメンバー

愛知県は浜島の計画をそのまま説明して、工業用水としては最終的には佐布里池建設により、愛知用水の通水断面余裕（田植時期分散による農業用水の需要のピーク分散）の利用と佐布里池建設により毎秒五立方メートル以上を供給することができると回答した。

これでOKとなり、一連の臨海工業地帯は知多西岸に設置することに決定した。（昭和三十五年二月二十三日）

当初三〇〇万トンの粗鋼生産量は、愛知製鋼、大同製鋼、石川島播磨、中部電力、出光興産、東邦ガスなど一連の臨海工業地帯建設によって年産一、〇〇〇万トン以上の粗鋼生産量可能となり、アメリカに輸出、トヨタ自動車は知多半島北部から西三河にかけて圃場整備し農地を集団化し、余った土地と労力を利用して自動車の部品作りの関連工場を興こし、自動車の組立てを自動化し、低コストの自動車の輸出によって空前のドル蓄積となり、ドル価は三六〇円が三〇〇円、さらに一〇〇円となる効果を發揮して、日本経済は一大飛躍を遂げた。

日本経済の象徴、工業生産量の消長を見ると、日本の工業生産量はバブル経済の崩壊前の平成三（一九九二）年頃、全国で三三二兆円を境として次第に下降線をたどっているが平成



トンネル掘削工事



幹線水路工事



幹線水路工事も急ピッチ



幹線水路完成



愛知用水公団主催で行われた「愛知用水事業全面着工記念」式典



公団主催の式典に参加できなかった農村同志会のメンバーは武豊町堀田稲荷に集まり、喜びを分かち合った。

六（一九九四）年（二九九兆円）、平成九（一九九七）年（三三三兆円）、平成十（一九九八）年、  
（三〇五・八兆円）、平成十一（一九九九）年（二九一・四兆円）、愛知県の生産量は昭和五十  
年代の前半頃は全国で五、六位にあったものが昭和五十五年頃から全国一となり、昭和六十  
二年頃から第二位の神奈川県を毎年十兆円以上離している。これは、臨海工業の差であるこ  
とが明らかである。すなわち愛知用水の効果であるということができる。

一つのプロジェクトがこれほど日本経済の消長に及ぼすことを当時誰が考えたであろうか。  
当事者久野庄太郎といえども夢にも考えなかった。

一方、愛知用水公団は陣容を整えて、

牧尾ダム 畔柳嘉男

水路 所長 森平安次郎

副所長 上滝要美

第一工区 兼山―愛岐トンネル出口 佐野 鑑尔

第二工区 愛岐トンネル出口―高蔵寺サイフォン 松竹 兼義

第三工区 高蔵寺サイフォン出口―海老池 日比野文雄

第四工区 海老池―八幡サイフォン入口 星野 義一

第五工区 八幡サイフォン―内福寺 小島 盈

第六工区 補助溜池三好池 斎藤 匡明

主なる支線水路 日東支線

三好支線

東浦支線（ポンプ有）

愛知県耕地課

半田支線

師崎支線

東郷池（愛知池）

佐野鑑尔

耕地整備 愛知用水土地改良区委託実施

開墾開田 愛知県農地開拓課委託実施

と着々工事を進め、工事完成へと地歩を進めて行った。

松野池（三五〇万立方メートル）、岐阜可児郡の防災ダム 岐阜県農地部実施

三好池、三好町新屋の曲池を拡大（二〇〇万立方メートル）

その他、鎌ヶ谷（一〇〇万立方メートル）、明治池（二五〇万立方メートル）、知多旭大池（五〇

万立方メートル）、半田池（二〇〇万立方メートル）、椎池（五〇万立方メートル）、青山池（二〇〇万

立方メートル）、長成池（一〇〇万立方メートル）、明神池（二五〇万立方メートル）計 一、二〇

〇万立方メートル

合計一、五五〇万立方メートル 建設する予定であったが、東郷池発見により、鎌ヶ谷以

下、知多半島内の補助溜池（計一、〇〇〇万立方メートル）は不要となった。

## 8 愛知用水の大恩人 吉田茂先生（久野庄太郎「躬行者」九八号より）

後年、昭和四十三年十一月二十日、吉田茂先生が亡くなられた。今月二十日、五賢堂に祥月まいりをした。時には青山墓地へもお参りするが、やはり終焉の地がお懐かしい。顧みま

すれば、昭和二十三年十二月二十五日、同志十数名と永田町の首相官邸で、佐藤栄作先生の御紹介で吉田総理にお会いできて、浜島さんの書いた大きな地図を広げ、愛知用水計画の説明を申し上げたとき、「食糧増産、失業救済、いいじゃないか」と取り上げて下さり、今日あるわけでありますが、愛知用水は、われわれ小百姓どもの力でできた用水ではない。沢山の人のお力添えによってできた。なканずく吉田茂先生のお力によるところが決定的でありました。

昭和三十年十月、公団が設立された。当初三百十一億円の予算が計画変更や、物価の騰貴で二十億円アップになった。愛知用水は世界銀行からも一千万ドルの借款が決まっていたので、事業説明のために桜井理事が渡米して帰国された。私は感謝の気持ちでご挨拶に桜井理事の御宅に御礼に上がった。桜井さんは、

「御礼どころの話ではない。世銀は金を貸さないんだ」  
その理由をたずねると、

「公団が提出した予算が二十億円増額に対して、日本政府が承認しないから、そんな事業に対しては、世銀は融資できないという。私達は米国に行つて、本国の承認を待っていたが、ついに大蔵省は増額を認めないため、帰国した。大蔵省は、工事にかからぬ先から増額は認められない、とのことで残されたただ一つの道は、大蔵大臣に直接頼むよりほかない」という。

「それなら早く大蔵大臣に頼んで下さい」と言うのと、

「すでに何回も頼んだがだめだった」

「では、農林大臣に頼んでもらってはとうですか」

「とても段違いで歯が立たない」

「困ったですね。誰か良い人はいませんか」

「池田さんが拒否できないような人がいいのだがなあ」

「では吉田さんにも頼んでもらってはとうですか」

「大きなことを言うな、吉田さんに頼みに行く人がないんだ」

「では私が頼みに行つたではまずいですか」

「それは君だつてよかろうが、吉田さんが相手になつて下さるかどうかだ」

「大丈夫だと思えますが、来いと言われた時はあなたも一緒に大磯へ行つて、世銀のことを説明して下さいますか」

「それは一緒に行くがね」

桜井さんは一向に私を信用しない。

「では今すぐ大磯に電話して聞いて見ますが、お宅の電話を貸していただけますか」

電話は貸して下さつたが、桜井さんは半信半疑であつた。さっそく大磯三二一番に電話して安齋秘書さんにいろいろ事情を話して都合を聞いてもらった。吉田先生の御返事は、今月は詰っているが、月が変わつたら来いと返事。桜井さんもようやく本気になつて、来月初めに一緒に行つて下さる約束をして帰つた。

私は気が気ではない。十年間、苦心に苦心してここまで来て、水泡に帰してしまつては、死ぬにも死ねない。悲しい時の神頼みと、私はその頃日誌を記していないので日は定かではないが、昭和三十二年一月二十三日、『愛知用水史』を見ると、「桜井さん外四名、渡米二週

間在米して帰る」とあるから、月が変わって、公団に出て、桜井さんに、

「さあ大磯へお供しましょう」

と言った日は昭和三十二年二月一日だと思ふ。桜井さんは、きわめて困ったような顔をして、

「実はちょっと困ったのだ。さる人に聞いたら、そういう所へは一緒に行かない方が良いとのこと、すまぬが、あんた一人で行ってくれないか」

と言われる。

「さあ困ったなあ、二人一緒にお願ひに行くと言つてある。一人では先生に嘘をついたことになる。困ったなあ」

「であろうが、困ったから頼む。にわかにな病氣とか何とか言つて行つてくれ。車は公団から出すから」

とのことで、止むを得ず、私一人で大磯へ行つて先生に会つた。私は嘘を言うのが辛かったが止むを得ぬので、桜井理事は病氣で同行できなかった、と申し上げた。先生は、それを真に受けて、外国から帰ると、氣候の変化などで病氣が出ることもあるのだと言われたので、やれやれと冷汗をかいだ。

さて、いよいよ二十億円の増額の件を話した。私も命がけであつた。先日、安齋さんを通じてちよつと事情を申し上げてあるが、今日改めて、わけを話してお頼みした。ところが先生は、

「俺は大臣ではないから知らんぞ。用水の責任者に大蔵省に行つてもらえ」と言われるので、

「それができないからお願いに来た」

と言っても相手にされない。私もこれが最後だと思って、

「愛知用水は、先生のお力添えでここまで来ました。世銀借款も先生が渡米の時、世銀総裁ユージン・ブラックに頼んで下さったから成立しました。仏を作って眼を開けぬというところがあります。吉田用水だと思います。なんとかご協力下さい」

と必死にお願いした。とたんに先生は大きく笑われて、

「吉田内閣が解散して、愛知用水も二、三年足踏みしたなあ」

と言って、なお笑われた。私の格好がよほど面白かったらしい。

「俺は知らんぞ」

と言われても重ねてお頼みして汗さえ流して吉田邸を出た。実に「終生難忘」の思い出であった。帰郷して桜井理事に報告しようとして、電話で所在を確かめたが、不在であったので、止むなく失礼して帰った。

十日くらい過ぎたとき、愛知用水二十億増額の新聞が出たので、私は後悔した。やはり、私達百姓が走らんでも、大蔵省は考えているんだなあと思って、数日後、上京して、御厄介になっている代議士先生にお会いした。愛知揆一先生が私を見るなり、

「久野さん、お礼に行っただか」

と言われてとまどった。

「どこへですか」

「冗談じゃないぞ。大磯から使者があつたので、私は池田さんに会って頼んだぞ。新聞発表を見たか」

と言われて二度びっくり、

「早く大蔵省に行つて、大臣にお礼を言いなさい」

と言いなながら、親切に電話で大蔵大臣の在否を聞いて、私が行くことをご紹介下さった。

しばらくすると、安齋さんからも連絡があり、近日中に東京の砂防会館で池田首相に会うことができるようになってから、日取りと時間を愛知揆一氏に聞いて、お願いして来いとのことであった。当日、砂防会館の一室で池田新首相に会うことができた。池田さんに会うのは初めてではなく、大蔵大臣として、愛知用水の世界銀行交渉の際に予算増加の承認のお礼に上がった時にお会いしている。池田首相は深々と頭を下げられ、こちらがとまどうほどであった。

これが低姿勢かと驚くほどであった。

「愛知用水のことですね。よく分かりました」

その時、私は、中国式の密植栽培で収穫した米を一升持つて行つて、さし出し、そのわけを簡単に話し、

「総理の所得倍増にあやかつて、倍以上の収穫を得たいと思いましたが、二倍まで穫れませんでした、二倍近く穫れました」

と言うと、

「ありがとうございます」

とまた、ていねいな挨拶をいただき、恐縮するほどであった。

「豊川用水の方々も、愛知用水公団が取り上げるまでには苦勞のあったことを忘れないで

下さい」

〈以下、浜島辰雄記〉

その後、久野さんは、池田首相が亡くなられても、命日を忘れずにいて、仏壇にお経を上げてお供えし、帰ろうとするそと夫人の池田満江さんが言われた。

「久野さん、あなたはいつまでお礼に来られるのですか」  
と聞かれ、

「私は御世話になった方には、私が生きている限り、お礼に上がるつもりです」  
と答えると、池田満江さんが、

「私は、息子が今度郷里で立候補しまして、応援に出た時の話の中で、久野さんという愛知用水をつくった立派な方があり、いつまでもお礼に来られる。そして、心からお経を上げていただける。恩というものは、着るべきものである、という話をしましたら、皆様がしみり聞いて下さいました」  
とおっしゃった。

同じことを広川弘禪さんの奥さんが言われた。誠心は通じるものである。これは久野さんのお供をして行き、私もそばで聞いていて、この心が愛知用水を創ったのだと今もしみじみと思ひ出される。

## 9 豊川用水に着目―用水建設終了後の心配

公団の技術者の仕事を探す

久野さんと私は、昭和三十五年夏のある日、愛知用水公団の労働組合の高橋次郎委員長と

長瀧退造副委員長に呼ばれ、ちよつと内密の話があるとのことで公団の五階の一室で相談を受けた。

高橋委員長から、

「愛知用水も完成に近づき、まことにおめでとうございます。今日、特別のお願いというのは、公団幹部には、立場上申し上げにくいので、折り入って久野さんにご相談申し上げます。愛知用水は完成に近づき、地元の皆様は大変結構でございますが、私たち、農林省や各県から来ている者は、愛知用水事業が終われば、それぞれ、元の職場に還ることになっております。三年、五年の間に私達は新しい技術を身につけて自信ができました。しかし、それぞれ元の職場では、私達の元のポストを新しい人が占め、私達が還ると混乱が起ります。なんとか用水公団が存続するか、私達の行き場を探していただきたい」

という言葉に久野さんは、

「ああ、忘れていた。申しわけなかった。これから、全国を廻って、あなた達の行き場を探しましょう」

と約束し、それからというものの、自費で全国を廻り、年間数十億円投資できるプロジェクト探しに奔走した。

まず第一に熊野川の上流にダムを建設し、その水を奈良平野に導入し、灌漑する計画であるが、初めて見る計画は非常に興味深く、案内してくれた牧野（三重高農・京大）から熱心な説明をうけ、夜の懇談会も有意義であったが、やはり規模が小さく、仕事自体が終わりかけており、残念ながら、私達の目標とする規模ではなかった。帰路、牧野から野洲川の計画を見て行くようにすすめられていたので、私は単身、野洲川ダムを見て東海道経由で帰名した。

これはすでに事業はほとんど終っており、前所長が畔柳嘉男、佐野鑑尔であったので、非常に参考となった。

久野さんはそれから、北海道から九州まで、ひまを作ってはあらかじめ公団の技術者に紹介状をもらっては歩き廻った。旅費は自費で、三祐株式会社の利益で賄うよりほかなかったが、とにかく全国県単位の計画を現地に行つてつぶさに見て廻った。

しかし、年間に少なくとも五十億円くらい投資して効果のある計画はそんなにあるものではない。計画はあっても、規模が小さ過ぎたり、規模は手頃でも、そのボス同士が気が合わぬとか。大切な人材をまかせられるような計画はなかなか見つからなかった。

近くに豊川用水があった！

そこで、今一度探し直してみたら、同じ県内に豊川用水計画があった。忘れていた。愛知県としては、愛知用水を始める前にすでに着工しており、豊橋を中心に熱心に計画を進めている。河合陸郎豊橋市長も立派で、地域の中心となって進めて行くには非の打ちどころない人だ。ただ、愛知県に続けて二つも大計画を進めてよいものか。これはやはり、吉田先生に御相談申し上げて進めるべきだと大磯へ相談に上がった。

相変わらずニコニコして会って下さった。

「なんだ、また困ったことができたか」

と先手を打たれてしまったが、久野さんが思い切つて申し上げた。

「実は愛知用水公団のことですが、私が心配しなくてもよいことではありますが、愛知用水が終ったら公団の職員の行き場の問題が心配です。私達は大変に御世話になったばかりで、

私も日本中駆けずり廻って探しましたが、適当なところがありません。ところが、よく考えてみますと、同じ県内でまことに申しわけないような気がしますが、豊川用水が一番よいように思いまして相談に上がりました」

と言うと、

「なあに、よいことなら同じ県内にいくつあろうがかまわない。俺は大臣ではないから池田に言え、池田に言え」

と言われてニコニコしていらつしやる。久野さんが

「池田さんに言えと言われても、池田さんに会う手だてがありません」  
と言うと、

「なあーに、会えるようにしてやるから心配するな」

と言われてニコニコして葉巻を吹かしていらつしやる。

以下、吉田さんと久野さんの会話とイラン開発の話と久野さんの文章で復元してみよう。

「そこで、もう一つ相談申し上げたいのですが、技術者の中には、愛知用水の世界銀行の仕事のやり方を見ていると、コンサルタントの使い方が非常にうまく行っている。そこで、私の長男の彦一と言いますが、公団や農林省の技術者にすすめられて三祐コンサルタントという会社をつくって、イランの開発に出かける準備をしております。私もお蔭で破産も解除されましたので、私を社長ということにして準備しております。ここにも公団や農林省の優秀な技術者を収容できます」

と言うと、吉田さんの笑顔が一瞬変わって、

「それはよい。それはよいことだ。昔の戦争はバルカン半島で起こったが、これからは石

油の出る中近東がガンだ。イランの民生の安定は非常に大切だ。俺が前田イラン大使に紹介状を書いてやるから、息子をよこせ」

と言われた。私は知らず知らずに涙が溢れ出て来て止めようがない。吉田さんも黙って菓巻をくわえておられたが、「うんうん」といったような顔を向こうむきにされていたが、よほど心に相通じるものがあつたようである。

名古屋に帰って、彦一に話したら、

「ぜひ吉田さんに会って、前田大使への紹介状がいただきたい。いま、イランでは、首都テヘランの西南方、ガズビン平原一〇万ヘクタールの灌漑計画が発注されて、各国のコンサルタンツが競争して発注に応じているところで、近日中にイランに出張する予定だ」

と言ったので、機を失せず紹介状をいただきに上がりたいと思い、さっそく秘書の安齋さんに都合を伺って、大磯へ彦一を伴って参上した。

イランの情勢を彦一が説明すると、大変興味を持って話を聞かれた。今までに彦一のような野人に直接話を聞かれたことがなかったかもしれない。そこで、イランの図面を出してイランの大体の情勢を話し、テヘランの北にはエルブルズ山脈がヒマラヤから続いてきており、最高峰がベマベント山（五、六七メートル）で、北側はカスピ海に流れ込む河の水を利用して稲作や柑橘が作られて、稲は穂摘みで、高倉式の倉庫に貯蔵しており、日本の天平時代と同じで、それを広場で牛に踏ませて脱穀すると話したり、キャビアの産地で、これがイランのキャビアですと説明し、進呈した。大変面白がって聞かれ、何かの拍子に久野さんが口をはさんだら、彦一が「お前、まだ見ずに話すから違う」と言ったら、吉田さんが、「親

にお前まえと言うことがあるか」と叱なられた。

彦一はそこで、「私の郷里知多半島では、『御前ごぜん』から「お前」になったので丁寧な言葉です。阿久比という所では人のことを『貴様きさま』と言っております」

と言って弁解したら大笑いになった。

「とにかく面白い話だ。時々話しに來い」

と言われて、丁寧な紹介状をいただいて、イランに出発した。

次に、註は前後するが、愛知用水完了後の技術者の海外進出の一端をのべて何かの参考としたい。

## 10 株式会社三祐コンサルタンの設立

### 専門技術を活かす集団

世界銀行のプロジェクトの進め方を見ると、技術者の集団がそれぞれ得意の分野で計画を樹立するコンサルタツンツ会社が重要な役目を果たし、計画を進めて行く状態を見て、日本でもこういう専門の企業体が成立できるのではないかと考えた。

久野さんは昭和二十九年七月十七日に破産宣告を受け、破産者の桎梏しごくにもめげることなく、愛知用水運動、愛知臨海工業地帯の造成運動に不死身の努力を続けていたが、昭和三十六年三月四日、大内正夫破産管財人の特段の努力、債権者の協力もあり、名古屋地方裁判所民事二部より免責となった。

その間は三祐株式会社の順調な発展と努力もあって、若干の経済的余裕も出て、海外開発を行う会社の設立の運びとなり、昭和三十七年二月十日に、株式会社三祐コンサルタンツ・インターナショナルを設立し、久野庄太郎社長、久野彦一専務ということとなった。

三祐コンサルタンツ・インターナショナル設立後、最初ネパールのマヘンダラ国王からの紹介で東パキスタンのプラマクト河の開発の話が出たが、ネパールからは買うものがない。おまけにインドとの仲が悪いので、まず、これは敬遠して、金を日本政府が保障できるものをやることにした。そこで、まずイランの首都テヘランの南のガズビン平原一〇万ヘクタールの開発入札に参加することに踏みきった。

この地域はイランの首都の南に広がる年間降雨量が四〇〇ミリくらいの半砂漠（いわゆる土漠）である。エルブレス山脈に降った雪の水を取ってカナートで所々に水の出るオアシスをつくって、そこに集落が集まった地域がペルシャ湾まで続いている。世の中で砂漠といわれているのは、年間降雨量が一〇〇ミリ以下になると一木一草もない砂丘か石原で始末に出来ない。

エルブレス山の北側を通過して、西に向かってカスピ海に流れ込むタレガン河がある。この河を堰き止めてダムを作り、この水を一〇キロのトンネルでエルブレス山脈を南に越え、テヘランの南西のガズビン平原に導水灌漑して、小麦やブドウを作り、羊を飼う計画である。

資金については、イランは産油国であるから、石油を買えば、支払いについては心配ない。出光の工場が名古屋南部工業地帯（知多町地先）に進出してくる計画になっているので、出光の社長出光佐三氏に会って聞いてみると、「大丈夫だ、やれ。金をもらうことは心配ない。引き受ける」と言ってくれたのでやることにした。

この計画は大成功で、タレガン河をまず堰き止めてタレガンダムを作り、エルブレス山脈にトンネルを掘り、ガズビン平原に水を流し始めていた。

さっそく、アジアオリンピックの水泳競技のプールの水に間に合って大成功。水ができたので、戦車師団がテヘランから引越して来て国防のためにも役立った。工事はドイツのルフトハンザが請け負ったが、わが三祐の設計が正確で驚いていた。

エルブレス山脈のトンネルは一〇キロあって、双方から設計書にもとづいて掘っていったが、トンネルの中央でわずか五センチの狂いだけであったと、まずドイツ人が驚き、イラン人はこれを聞いて驚き、次のシスタン計画（一〇〇万ヘクタール）もやってくれと頼まれた。

なお、後年の話になるが、イランとイラクの間で国境線の問題で激しい戦争となり、イラクの優勢な航空機の爆撃を受けてテヘランは廃墟となったが、ガズビン平原の食糧生産で持ちこたえて、戦争は負けなかったといわれている。戦争はないほうがよいが、勝たなくても負けなければよい。株式会社三祐コンサルタンツは、引き続いて、イランのシスタン平原、韓国、栄山江計画（世銀）、タイ国アユタヤ計画、コンケン計画（RID）、インドネシア、フィリピンなど、現在も東南アジア、中近東（アフガニスタン、イラン）で発展途上国の開発のために日夜努力を続けている。